

選擇集に於ける稱名勝行説の 由漸に關する一考察

香 月 乘 光

選擇集に於いて稱名念佛は選擇本願の行として頗る重視され、餘の一切の諸行が非本願の行として廢捨されるに對して、その意義と價值とが強調されているのである。今ここに云う所の稱名勝行説も、選擇本願の行としての稱名念佛の意義と價值とを擧揚せんとするもので、稱名念佛の功德が勝れ、之に對して餘行の功德がすべて劣つてゐることを主張するのである。このような説は法然以前の淨土教にあつては、嘗て見られなかつた所であり、法然獨自の説として、その教學を構成する上に、極めて重要な一環をなすものである。

稱名勝行の説は選擇集の諸處に見られる所であるが、その中心をなすものは第三章に示されている。それは阿彌陀佛がたゞ稱名念佛の一行のみを本願の行とし、餘行を以て本願の行とされなかつた理由を、勝劣難易の二義によつて説明し、稱名は勝にして易、餘行は劣にして難であると論斷された所で、逆修說法にも之と同様の説を出している。即ち稱名は佛の内證外用の一切の功德をすべて攝盡した萬德所歸の名號を稱念する行であるから、たゞ一部分の功德に限られる餘行の何れに比しても、勝行であるとするのであつて、その勝行たる所以は名號が萬德所歸であるという所にある。

一體稱名易行の説は龍樹の十住毘婆沙論以來、曇鸞、道綽等の既

に唱えた所であるが、このような稱名勝行の説は、法然に至つて初めて主張されたものである。選擇集第三章には何等稱名勝行の文據を示していないが、逆修說法（古本漢語燈錄第七）には西方要決の「諸佛願行成此果名、但能念號具包衆德、故成大善不廢往生。」という文を掲げ、更に無量壽經卷下の「其有得聞彼佛名號、歡喜踊躍乃至一念、當知此人爲得大利、則是具足無上功德。」と云う文を要約して出している。法然の稱名勝行の説は、この二文から導かれたものがあろうが、併しこれだけでは名號が萬德所歸であるという意は明かでない。

法然が選擇集に偏依の師として仰いだ善導は觀經疏第三定善義に「自餘衆行雖名是善、若比念佛者、全非比校也。」と云い、同第四散善義に「念佛三昧功能超絕、實非雜善得爲比類。」と述べて、念佛が餘行に勝れていることを示して居り、法然は選擇集第七章及び第十一章に之を引用しているが、併しこの文でも萬德所歸の意は示されない。又選擇集には源信の往生要集の文を引くこと九ヶ所に及び、引用書としては善導の著書について多いのである。従つてその關係も深いのであるが、往生要集には觀念と稱念とを並説し、觀勝稱劣の趣意を明しているのであつて、選擇集とその説を異にし、その中に文據を求めることは出来ない。

併し源信は往生要集以外の著書に於いて、名號を重んじ、稱名の行を強調している。即ち觀心略要集には、名號の功德は甚大であつて、阿彌陀の三字に三諦、三身、三寶、三德、三般若等の一切の法門を攝するのであるから、之を稱えればその功德によつて乃ち往生することが出来るとし、正修觀經卷中には、阿彌陀の三字は三諦を表し、三諦には一切法を攝盡し、又大小乗の經律論及び賢聖集法門

の一切の聖教、金剛界、胎藏界、蘇悉地は一切の聖衆を具するの
あるから、その名號を稱えれば、一切の聖教一切の聖衆を稱えるの
と同等の功德があり、更に三惑を破して三身佛を成ずることが出来
るとしている。この名號に一切法を攝盡するという源信の思想と、
名號は萬德の所歸であるという法然の見解との間には、關係がある
と考えられる。法然の三部經釋に名號の功德を説く中、「天台宗に
は空假中の三諦、正了縁の三義、法報應の三身、如來所有の功德こ
れをいでざるがゆへに、功德莫大なりといへり。」と述べているが、
これは正しく今の觀心略要集の説と一致して居り、選擇集の萬德所
歸の思想が、觀心略要集に導かれていることを示すものと見ること
が出来ぬ。仁平四年法然の二十二歳の時に忍空の撰した觀心往生論
にも、阿彌陀の三字に三諦、三德等を具し、之を稱えれば萬德を備
えることを説いて居り、法然も之を學んだものと察せられる。

又舜昌の述懷鈔には源信の著作念佛略記を引いて「因行果德自利
利他、内證外用依報正報、恒沙塵數無邊法門、十方三世諸佛功德、
皆悉攝在六字之中、是故稱名功德無盡」と云つてゐる。この文は九
卷傳第三下に法然の萬德所歸の説の文證として引用され、聖問も決
疑鈔直牒第六に引用して、法然の説と異らないことを指摘してい
る。即ちこの兩書は法然の説が、念佛略記の文に基づくことを示し
ているのであるが、特に内證外用の功德が名號に攝在するという點
に於いて、全く一致している。このように見てくると選擇集の稱名
勝行説は、源信の以上の著書に負う所のあることを知るのである。

源信の後に永觀が出て往生拾因を著し、稱名念佛を擧揚し、その
功德は深廣にして、大陀羅尼や法華三昧に勝過するとし、その功德
によつて三昧を發し、法身同體を觀じ、必ず往生を得ると説き、特

選擇集に於ける稱名勝行説の由漸に關する一考察（香月）

に名號に佛の萬德を具足することを明し、「彌陀名號中、即彼如來
從初發心乃至佛果、所有一切萬行萬德、皆悉具足無有缺減。非
唯彌陀一佛功德、亦攝十方諸佛功德。以一切如來不離阿字故、
因此念佛者諸佛所護念。今此佛號文字雖少具足衆德。（中略）何
況四十二字功德圓融無礙、一字各攝諸字功德。阿彌陀名如是。無
量不可思議功德合成。一稱南無阿彌陀佛、即成廣大無盡善根。」と
述べている。永觀は三論宗の人であり、又眞言を學んだのであつ
て、この文中に阿字や四十二字を説くのは、眞言の影響によるもの
であらうが、併し思想的に全體から見て、源信の説を受けたもので
あることが確かに認められる。又これを選擇集第三章の稱名勝行を
説く文に比ぶれば、その間に密接な關連のあることが明かに肯かれ
る。事實法然はこの文を見ているのであつて、逆修説法に往生拾因
の説を批判していることによつて知ることが出来る。保延五年法然
の七歳の時に珍海の著した菩提心集卷上にも「阿彌陀佛の名を念ず
べし、此名に無量無邊の功德を攝めたり。これをいへばすなはち無
量の功德よばれてわが身に來り集る。その時無始よりこのかたの煩
惱惡業逃去りぬ。」と云つてゐる。珍海は三論宗の人であるから、
即ち永觀の説を承けたものと考えられるが、兎に角これが選擇集の
萬德所歸の説と關連をもつことは明かとしなければならぬ。

法然は以上のような諸師の説をとり入れて名號が萬德所歸である
ことを明かにし、更に進んで稱名が一切の餘行に勝れるという自己
の見解を成立せしめたのである。この場合法然のその説は、選擇集
第七章に「念佛是本願行、諸行非本願。故云全非比校也。」と云
うように、稱名が本願の行であることによつて意義づけられ、佛意
がこめられてある所に無上の價值を見ることが忘れてはならない。